

熊本地震から3カ月 ルポ  
【福刊】回想法で語らい好影響  
横浜に重症心身障害児者施設を新設  
高齢化する公営住宅の未来は

2・3  
4  
5  
6

週刊

# 福祉新聞

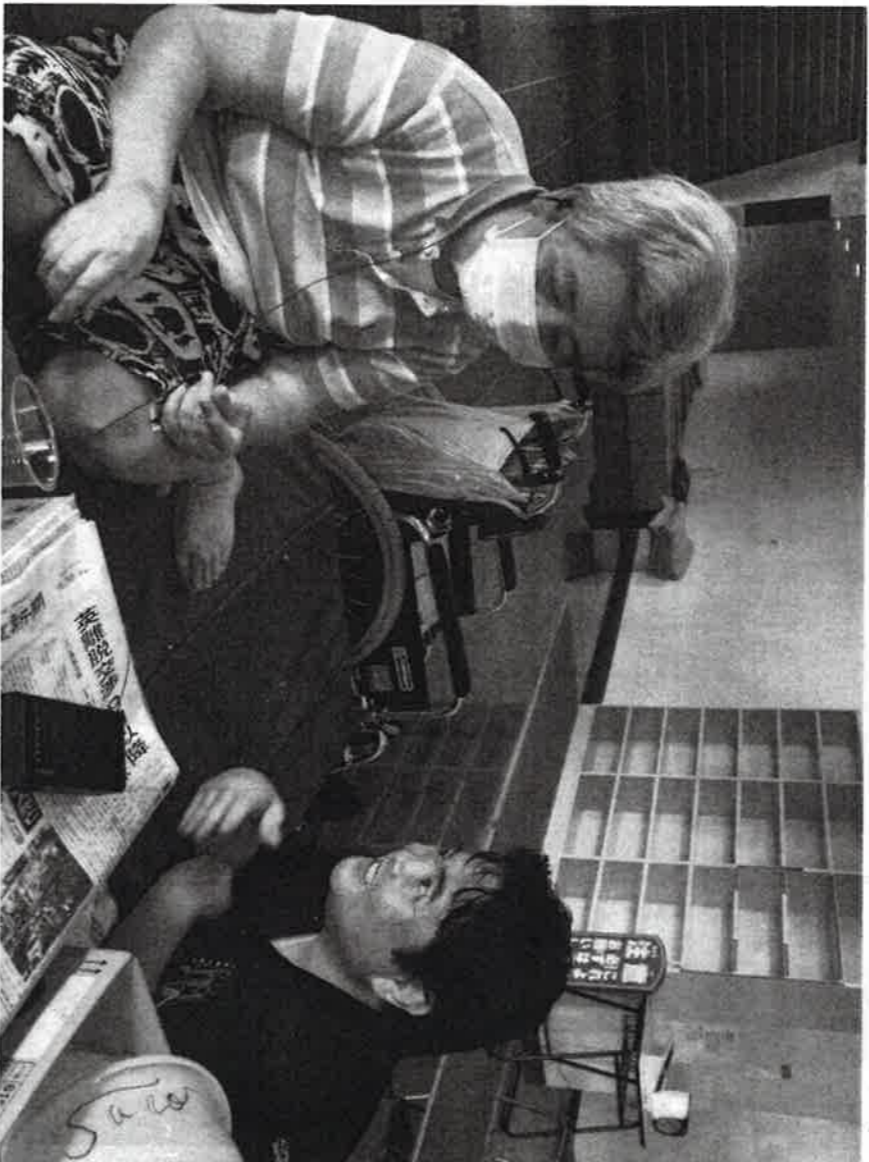
THE FUKUSHI SHIMBUN

1 第2771号 昭和30年5月27日第三種郵便物認可

2016年7月18日(月)発行

## 復旧進むも苦闘は続く

### 益城町 今なお800人避難



「館内は車いすで動くには狭く、景色も見えないので通路で過ごしている」という避難者を気に掛ける秋野さん(右) (6月30日午後3時、益城町総合体育館で)

死者7人(震災関連死亡含む)、不明者1人もの被害をもたらした熊本地震から3カ月。震度1以上の地震は1800回を超え、今も約4700人が避難している。生活インフラの復旧が進む一方で、福祉施設や避難所、支援団体などは、利用者や住民の安全を守ろうと奔走している。建設が始まった仮設住宅では新たな課題も生じている。苦闘が続く被災地の現状を伝える。(復旧新 秋島隆徳)

け付けたが、当初は別々に活動したため全休として機能していなかった。それぞれ違う団体に言われ1日に何回も血圧測った人もいた。そこで医療「シアル」カーがほとんどとなり、「ミニライ」避難している熊本県益城町の総合体育館。指付いたことを報告し、定管理者の公益財団法たり、感染症防止など、支援団体が連携した。

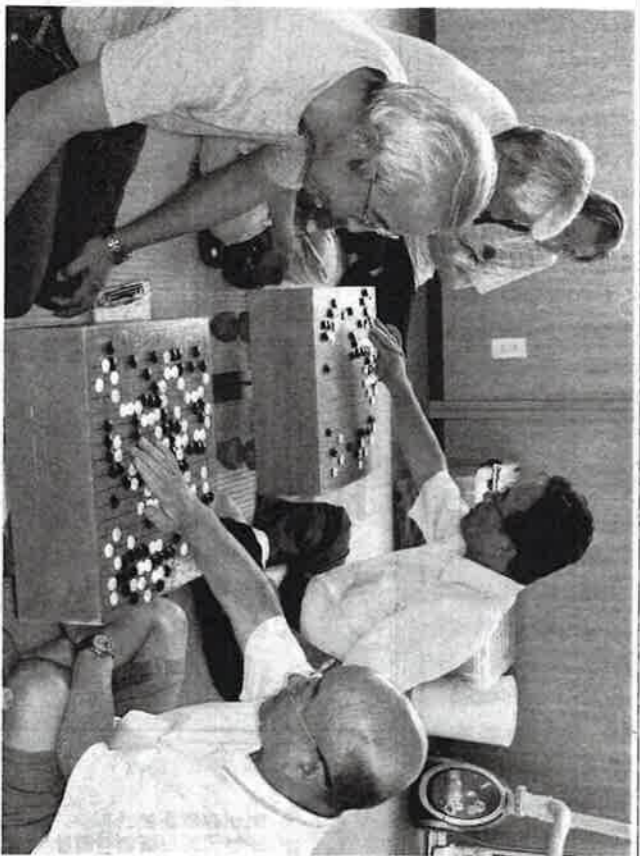
また避難者の声を拾い上げ、授乳室・炊爨場、ペット広場なども設置した。熊本YMCAにも自主意識を持って参加していた加代の男性は「自宅を片付けているが戻れるめでは立体的に活動することとせ

「福祉新聞」ご購読のお申し込みはWEBで  
www.fukushishimbun.co.jp/

◆定価 1万440円(税別・消費税込)



被災3カ月



よかましきハウスで囲碁を楽しむ避難者 (6月30日午後1時半)

支えながら楽しむ成功体験をしてもいい、次の仮設住宅などでミニエニターづくりに生かしてほしいという思いがある。また高齢者同士つなかりや避難所内での関わりも防上の狙いもある。

避難者の4割は65歳以上で、見守りが必要だ。食事の列につきあついで並ぶのが大変で、食事を抜く人、認知症の症状が出た人も見ている。そうした人を見つけて寄り添う。支援に入っている社会福祉法人賛會会(東京都)の眞鍋有美子・訪問看護士・インフォメーション所長も「耳が聞こえず支援情報が出回っていない高齢者もいた」と話す。

秋野さんは今後につ